
MiLky Way ~ 星の旅人 ~

こうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i l k y W a y 星の旅人

【Nコード】

N 1 0 5 8 Z

【作者名】

こうき

【あらすじ】

光の下に突然送られてきた、謎の指輪。

指輪から出てきた、謎の生物、ルル。

ルルは、光るに言う「彦星になつてもらうから」

新たな彦星になるために光は織姫と出会い。

彦星になるために、天の川へと向かう。

七夕

7月7日それは、織姫と彦星が一年に一度だけ会える日。
なぜ織姫と彦星は一年に一回しか会えないのか。

それは……

昔、天帝の娘の織姫が居ました。

織姫は天帝の言いつけどおり、毎日毎日機織りに励んでいました。
天帝はそのことに關心していましたが、年頃の女が恋もしないなんて不憫に思った天帝は、天の川の西がに住む牽牛と引き合わせました。

ですが、織姫は恋に夢中になり、仕事を全くしなくなりました。
それに怒った天帝は、二人を天の川の兩岸へと引き離しました。

そして天帝は二人が哀れに思い、一年に一回だけ会うことを許しました。これが天の川のお話。

彦星誕生（前書き）

作中に登場するルルとこれから登場するココを書いてもらいました
http://2114.mitemin.net/i36387
/

彦星誕生

居間でテレビを見ている、白星光 しらほしひかる の家にインターホンが家中に響き渡る。

「はい、今行きまーす」

今日は両親が朝から買い物に行き、光は一人家の中に居た。

光は玄関に行き、ドアを開ける。

「白星光さんのお宅ですね。お届けものです、ハンコをお願いします」

「ん、俺なんか頼んだっけ？」

身に覚えがない宅配便に不信感を抱く。

「確かに白星光さん宛てに届いてますよ。あつサインでもいいですよ」

光は宅配の人からペンを借り、サインを書く。

箱はそんなに大きくないA4サイズ位の箱が何処からか送られてきた。

その箱を持ってリビングへと戻ってくる。

「僕最近A○Z○n頼んだっけ? ——って発送先書いてないんだけど!？」

光は恐る恐る箱を開けてみた。
中には青いきれいな指輪が入っていた。

「何だこれ？」

箱の中身を確認するとひとつの紙が入っていた。
紙の内容はこの指輪を着けてテレビをつけてくださいという内容であった。

光は半信半疑のまま指輪を着けて、テレビをつけた。

——つけた先には、お昼のあのサングラスの人が映っているわけでもなく、テレビには天の川が映し出されていた。

「天の川……」

不思議に思った光は、新聞のテレビ欄で今の時間のテレビを確認する。やはり、天の川を映すようなテレビは、やっていない。

光がテレビの前で不思議がっていると、テレビの中の星、アルタイルの星が青白く輝き始める。

その光はやさしくすべてを飲み込むような感じがした。

光はだんだんと輝きを増していき、直接見れないほどの輝きになる。

「まっまぶしッ！」

光は眼をつむった。

数秒して、光は少し目を開けて光が収まっているのを確認して目を開ける。

「なっ何だったんだ？」

もう一度テレビに目を向けると、アルタイルの星が消えていた。
その星は、光の目の前に出てきていた。

画面の中にあった星が、今は光の目の前に浮いている。

何があだかわからない光は、じつとその小さく青白く光っている星を見ている。

光が星を触ろうとした瞬間、星は動き始めて光の指輪へと入っていく。

指輪はさつきまで光など発していなかったのに、今は青白い光を発している。

『ニンシヨウカンリヨウ。ジキヒコボシトウロクカンリヨウ』

指輪からそのような声が光に届く。

認証？ 次期彦星？

光はなぞの言葉の意味がわからず、ただ啞然としていた。

『光ー！ 聞こえるか？』

声変わりのしていない小学生の男のぐらいのかわいい声が聞こえる。

この声は光の耳ではなく頭に直接、流れ込んでくるように聞こえる。

「なんだ、この声！？ 一体どこから、聞こえてるんだ？」

『よかった、聞こえた。ひかるーその指輪を少し擦ってみてくれな
いか』

光はただ、その声の言うとおりに従い、青色の指輪を擦る。

擦ると指輪からなぞの生物が出てきた。

その姿は、青色で風船のような形をした体、猫の耳が生え、左耳には星がついており、背中から羽が生えている、体から猫の尻尾が生えている。

その見たこともない生物は、浮いている……

「ふっはー！ やつと出れたぜー、いやー長い旅だったあー君に会いに来たんだよ——光」

次の謎の声は頭の中ではなく、耳に届いた。

「俺に会いに来た……」

自分に会いに来たと言って来た、このなぞの生物。

かわいい外見を持っているが、しゃべり方は荒々しいのが特徴的。

「あれー光？ どうしたのだ、具合でも悪いの？」

しばらくの間、このなぞの生物を見てみると、話しかけてきた。

「具合はなんともないけど——君は一体何者？」

たくさん疑問があったが、はじめに聞いたことは——何者か。

「ボク？ ボクは彦星の守り星の“ルル”って言う名前」

「ルル……彦星の守り星……」

彦星の守り星とは何なのか、ルルという生物に疑問がたくさん残

っている。

「唐突だけど、光には彦星になってもらうから」

命令口調で言われた言葉は、彦星になってもらう。

彦星誕生2

「待てよ！ いきなり現れて、彦星になれだって、どういうことだよ？」

少し声を荒げながら、光はルルに言う

ルルは光ことをずっと見ながら部屋を飛び回っている。

「うーん、勢いで言えばYESって言ってくれるかと思ったのにな」

ルルは、机の上に降りた。

「光ちゃんは何が聞きたいの？」

「光ちゃん？ まあいいや。とりあえず、彦星って何だよ？」

ルルは咳払いをひとつして答え始めた。

「織姫と彦星に居ること天の川が壊れずに維持できているんだよ」「壊れる？ 天の川が壊れるって？」

ルルは少し険しい表情になる。

「壊れるというか……天の川がこの地球に落ちて、天の川が地球に落ちてきてどちらとも壊れるんだよ……」

そのルルの意言葉で光は驚きのあまり、声も出なかった。

——地球が壊れる……

「いや、嘘だろ？」

「本当だよ、嘘は付いてないよ。だからね、光ちゃんは明日学校へ行って、織姫を探すんだ」

「織姫も光と一緒に、その指輪を着けてるよ。織姫の指輪は赤く光ってるから」

ルルは、ひとつも嘘をついていないように見える。

「それは断ることはできないの？」

「光ちゃんは彦星に推薦されてるんだ、だから断ることもできるよ」

断ってもよいと聞いて、光は少し考え始めた。

——五分、十分。

「何で俺が推薦されたかわかんないし、その天の川って何なのかもまったくわかんないけど、俺は——彦星とやらになってみてやるよ」

「ありがと、光ちゃん。ボクもまだまだ、ぜんぜん言うこともいえてないけど、理解してくれてありがと。これからよろしくね！」

ルルは握手右手を差し出し、光もそれに答える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1058z/>

MiLky Way ~ 星の旅人 ~

2011年12月17日10時51分発行